

(19) 日本国特許庁 (JP)

(12) 登録実用新案公報 (U)

(11) 実用新案登録番号
実用新案登録第3198425号
(U3198425)

(45) 発行日 平成27年7月2日 (2015.7.2)

(24) 登録日 平成27年6月10日 (2015.6.10)

(51) Int.Cl. F 1
A 4 7 G 19/22 (2006.01) A 4 7 G 19/22 L
A 4 7 J 31/06 (2006.01) A 4 7 J 31/06 1 6 O
A 4 7 J 31/18 (2006.01) A 4 7 J 31/18

評価書の請求 未請求 請求項の数 8 O L (全 17 頁)

(21) 出願番号 実願2015-1977 (U2015-1977)
(22) 出願日 平成27年4月20日 (2015.4.20)

(73) 実用新案権者 510131742
株式会社葛山園
愛知県名古屋市北区清水二丁目15番8号
(74) 代理人 110000291
特許業務法人コスモス特許事務所
(72) 考案者 葛山 芳樹
愛知県名古屋市北区清水二丁目15番8号
株式会社葛山園内

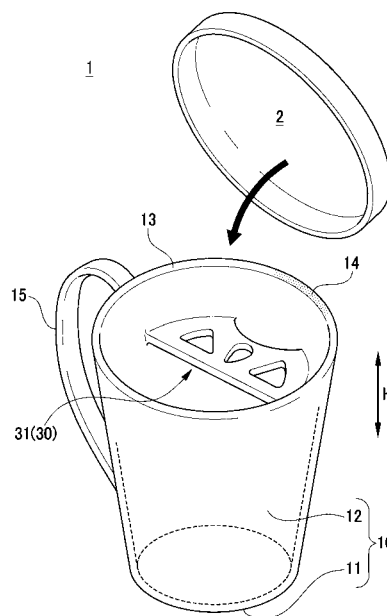
(54) 【考案の名称】 飲料用食器

(57) 【要約】 (修正有)

【課題】 食器内に入れた嗜好素材の浮上を防止した上で、蒸らした嗜好素材から嗜好成分を自然な状態で抽出することにより、淹れた飲み物をおいしく味わうことができる飲料用食器を提供する。

【解決手段】 容器本体10内で、ティーバッグに封入したコーヒー粉材の嗜好成分を熱湯に抽出するコーヒーを淹れて飲むのに用いる蓋2付きのカップ1で、容器本体10の底面に対向して配置される素材保持部31に、開口孔が形成された素材流動規制部30を備えている。素材保持部31は、容器本体10の開口断面のうち、第2基準位置側寄りの一部の範囲を残して、第1基準位置側の側部12に隣接する基部から第2基準位置側の最外縁部にわたり延在している。熱湯を注入後、素材保持部31は、容器本体10内で流動するティーバッグ全体を保持する。

【選択図】 図1



【実用新案登録請求の範囲】

【請求項 1】

容器本体内に、袋に封入された嗜好素材を入れ、水を注ぎ、嗜好素材に含む嗜好成分を注いだ水に抽出してなる飲み物を、淹れて飲むのに用いる飲料用食器において、

前記容器本体の底面に対向して配置される素材保持部に、開口孔が形成された素材流動規制手段を備え、

前記容器本体の側部の上周縁で、飲み物を飲むのに口を付けるリップ部位を含み、かつ前記容器本体の深さ方向に対し、前記側部に沿う位置を第 1 基準位置とし、前記第 1 基準位置の反対側となる位置を第 2 基準位置とすると、

前記素材保持部は、前記容器本体内の開口断面のうち、前記第 2 基準位置側寄りの一部の範囲を残して、前記第 1 基準位置側の前記側部に隣接する基部から前記第 2 基準位置に向けた最外縁部にわたって延在していること、

前記容器本体に水を注いだ後、または、飲み物を飲むときに、前記素材保持部は、前記容器本体内で流動する前記嗜好素材を保持すること、
を特徴とする飲料用食器。

【請求項 2】

請求項 1 に記載する飲料用食器において、

前記容器本体の前記底面の中心を通る軸線と直交して、前記第 1 基準位置と前記第 2 基準位置とを繋ぐ線分の距離を容器開口距離とすると、

前記素材保持部の前記最外縁部は、前記第 1 基準位置を基点に、前記容器開口距離に対し、 $1/3$ 以上、かつ $2/3$ 以下の範囲内の距離に相当する位置に配置されること、
を特徴とする飲料用食器。

【請求項 3】

請求項 1 または請求項 2 に記載する飲料用食器において、

前記素材保持部は、前記容器本体の前記側部に固定されていること、
を特徴とする飲料用食器。

【請求項 4】

請求項 1 または請求項 2 に記載する飲料用食器において、

前記素材流動規制手段は、前記容器本体の前記側部と着脱可能であること、
を特徴とする飲料用食器。

【請求項 5】

請求項 4 に記載する飲料用食器において、

前記素材流動規制手段は、前記素材保持部と連結する食器係留部を有し、

前記食器係留部は、前記側部の前記上周縁に着脱されること、
を特徴とする飲料用食器。

【請求項 6】

請求項 5 に記載する飲料用食器において、

前記食器係留部は、周長方向に対し、途中区間で分割、または部分的に離間した離間部を有し、

前記容器本体に前記素材流動規制手段を取付けた状態では、前記リップ部位が、前記離間部を通じて露出していること、
を特徴とする飲料用食器。

【請求項 7】

容器本体内に嗜好素材を入れ、水を注ぎ、嗜好素材に含む嗜好成分を注いだ水に抽出してなる飲み物を、淹れて飲むのに用いる飲料用食器において、

前記嗜好素材より小さい開口でメッシュ構造に形成された素材保持部と、前記素材保持部に連結した食器係留部とを有する素材流動規制手段を備え、

前記食器係留部は、前記容器本体の側部にある上周縁と着脱可能に形成されていること、

前記食器係留部を前記上周縁に取り付けた状態では、前記容器本体内で、底面と、また

10

20

30

40

50

は前記側部の内面と前記底面とにより囲まれた内部空間を形成できるよう、前記素材保持部は、ドーム形状の形態、または前記容器本体内の開口断面を斜めに横切る形態に形成されていること、

前記容器本体に水を注いだ後、または、飲み物を飲むときに、流動する前記嗜好素材が、前記内部空間内で保持されていること、
を特徴とする飲料用食器。

【請求項 8】

請求項 1 乃至請求項 7 のいずれか 1 つに記載する飲料用食器において、
前記容器本体を閉塞する蓋を備えていること、
を特徴とする飲料用食器。

10

【考案の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

この考案は、飲み物の中でも、例えば、日本茶や紅茶の茶葉、豆を挽いたコーヒー粉材等の嗜好素材を容器内に入れ、湯（水）を注いで淹れた茶やコーヒー等の飲み物を飲むのに用いる飲料用食器に関する。

【背景技術】

【0002】

日本茶や紅茶等を手軽に淹れるのに、ティーバッグを用いた淹れ方が近年、家庭やオフィスをはじめ、車両内の飲み物販売等、あらゆる日常生活の場で広く普及している。この淹れ方は、茶葉等の嗜好素材を封入したティーバッグを、カップ等の飲料用食器内に入れ、この食器に注いだ湯に嗜好素材から嗜好成分を抽出するものである。ところが、この方法で淹れる飲み物では、嗜好素材入りのティーバッグを食器内に入れた後、湯がこの食器内に注がれると、嗜好素材入りのティーバッグ内にガス（空気や、コーヒーの場合に発生する炭酸ガス）を包含しているため、ティーバッグが浮いてしまい、嗜好成分の抽出が適切にできない問題があった。この問題の解決策の一つとして、特許文献 1 の飲料カップが、開示されている。

20

【0003】

特許文献 1 は、紅茶の茶葉等を封入したティーバッグを紙製の飲料カップの底に配し、このティーバッグを、押圧部材及び操作棒と一体化したプラスチック製の中蓋で覆い、操作棒を昇降させる飲料カップである。この飲料カップでは、カップ内に注いだ湯が、中蓋の通過孔を通じてティーバッグに触れ、湯の注入後、押圧部材でティーバッグを押すことにより、ティーバッグの浮上が抑止できていると共に、注いだ湯に紅茶成分等の嗜好成分を抽出することが促進できる。

30

【先行技術文献】

【特許文献】

【0004】

【特許文献 1】特開平 5－300809 号公報

【考案の概要】

【考案が解決しようとする課題】

40

【0005】

しかしながら、特許文献 1 では、紅茶等の飲み物を淹れるのに、茶葉等の嗜好素材を封入したティーバッグを、中蓋で覆いながら、操作棒の昇降により押圧部材で押圧したこのティーバッグから抽出液（嗜好成分）が搾り出されている。そのため、ティーバッグから嗜好成分の抽出は促進できているものの、飲み物のうまみ成分以外に、渋みや苦み成分までもが、嗜好素材から抽出されてしまい、特許文献 1 の飲料カップでは、淹れた飲み物をおいしく味わうことができない。また、中蓋の通過孔が、ティーバッグの通り抜けを阻止できる程度の大きさとなっているため、ティーバッグに封入せず、ハーブや薬草等を特許文献 1 の飲料カップに直接入れてハーブティーや薬草茶等を淹れたい場合には、ハーブ等の嗜好素材が、中蓋の通過孔を通り抜けてしまう虞がある。従って、特許文献 1 の飲料カ

50

ップは、このようなハーブティー等を飲む場合には適さない。

【0006】

本考案は、上記問題点を解決するためになされたものであり、食器内に入れた嗜好素材の浮上を防止した上で、蒸らした嗜好素材から嗜好成分を自然な状態で抽出することにより、淹れた飲み物をおいしく味わうことができる飲料用食器を提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【0007】

上記目的を達成するために、本考案に係る飲料用食器は、以下の構成を有する。

(1) 容器本体内に、袋に封入された嗜好素材を入れ、水を注ぎ、嗜好素材に含む嗜好成分を注いだ水に抽出してなる飲み物を、淹れて飲むのに用いる飲料用食器において、前記容器本体の底面に対向して配置される素材保持部に、開口孔が形成された素材流動規制手段を備え、前記容器本体の側部の上周縁で、飲み物を飲むのに口を付けるリップ部位を含み、かつ前記容器本体の深さ方向に対し、前記側部に沿う位置を第1基準位置とし、前記第1基準位置の反対側となる位置を第2基準位置とすると、前記素材保持部は、前記容器本体内の開口断面のうち、前記第2基準位置側寄りの一部の範囲を残して、前記第1基準位置側の前記側部に隣接する基部から前記第2基準位置に向けた最外縁部にわたって延在していること、前記容器本体に水を注いだ後、または、飲み物を飲むときに、前記素材保持部は、前記容器本体内で流動する前記嗜好素材を保持すること、を特徴とする。

(2) (1)に記載する飲料用食器において、前記容器本体の前記底面の中心を通る軸線と直交して、前記第1基準位置と前記第2基準位置とを繋ぐ線分の距離を容器開口距離とすると、前記素材保持部の前記最外縁部は、前記第1基準位置を基点に、前記容器開口距離に対し、 $1/3$ 以上、かつ $2/3$ 以下の範囲内の距離に相当する位置に配置されること、を特徴とする。

(3) (1)または(2)に記載する飲料用食器において、前記素材保持部は、前記容器本体の前記側部に固定されていること、を特徴とする。

(4) (1)または(2)に記載する飲料用食器において、前記素材流動規制手段は、前記容器本体の前記側部と着脱可能であること、を特徴とする。

(5) (4)に記載する飲料用食器において、前記素材流動規制手段は、前記素材保持部と連結する食器係留部を有し、前記食器係留部は、前記側部の前記上周縁に着脱されること、を特徴とする。

(6) (5)に記載する飲料用食器において、前記食器係留部は、周長方向に対し、途中区間で分割、または部分的に離間した離間部を有し、前記容器本体に前記素材流動規制手段を取付けた状態では、前記リップ部位が、前記離間部を通じて露出していること、を特徴とする。

(7) 容器本体内に嗜好素材を入れ、水を注ぎ、嗜好素材に含む嗜好成分を注いだ水に抽出してなる飲み物を、淹れて飲むのに用いる飲料用食器において、前記嗜好素材より小さい開口でメッシュ構造に形成された素材保持部と、前記素材保持部に連結した食器係留部とを有する素材流動規制手段を備え、前記食器係留部は、前記容器本体の側部にある上周縁と着脱可能に形成されていること、前記食器係留部を前記上周縁に取り付けた状態では、前記容器本体内で、底面と、または前記側部の内面と前記底面とにより囲まれた内部空間を形成できるよう、前記素材保持部は、ドーム形状の形態、または前記容器本体内の開口断面を斜めに横切る形態に形成されていること、前記容器本体に水を注いだ後、または、飲み物を飲むときに、流動する前記嗜好素材が、前記内部空間内で保持されていること、を特徴とする。

(8) (1)乃至(7)のいずれか1つに記載する飲料用食器において、前記容器本体を閉塞する蓋を備えていること、を特徴とする。

【考案の効果】

【0008】

上記構成を有する本考案の飲料用食器の作用・効果について説明する。

(1) 容器本体内に、袋に封入された嗜好素材を入れ、水を注ぎ、嗜好素材に含む嗜好成分を注いだ水に抽出してなる飲み物を、淹れて飲むのに用いる飲料用食器において、容器本体の底面に対向して配置される素材保持部に、開口孔が形成された素材流動規制手段を備え、容器本体の側部の上周縁で、飲み物を飲むのに口を付けるリップ部位を含み、かつ容器本体の深さ方向に対し、側部に沿う位置を第1基準位置とし、第1基準位置の反対側となる位置を第2基準位置とすると、素材保持部は、容器本体内の開口断面のうち、第2基準位置側寄りの一部の範囲を残して、第1基準位置側の側部に隣接する基部から第2基準位置に向けた最外縁部にわたって延在していること、容器本体に水を注いだ後、または、飲み物を飲むときに、素材保持部は、容器本体内で流動する嗜好素材を保持すること、を特徴とする。これにより、容器本体で飲み物を淹れるのにあたり、袋に封入された嗜好素材が、水（熱湯）を注入した容器本体内で浮上することなく、渋みや苦み成分の抽出を抑えつつ、飲み物のうまみ成分を、袋に封入されている嗜好素材から熱湯等に、自然な状態で抽出することができる。ひいては、淹れた飲み物の味がよりおいしくなる。

10

【0009】

従って、本考案に係る飲料用食器によれば、飲料用食器内に入れた嗜好素材の浮上を防止した上で、蒸らした嗜好素材から嗜好成分を自然な状態で抽出することにより、淹れた飲み物をおいしく味わうことができる、という優れた効果を奏する。

【0010】

(2) (1)に記載する飲料用食器において、容器本体の底面の中心を通る軸線と直交して、第1基準位置と第2基準位置とを繋ぐ線分の距離を容器開口距離とすると、素材保持部の最外縁部は、第1基準位置を基点に、容器開口距離に対し、 $1/3$ 以上、かつ $2/3$ 以下の範囲内の距離に相当する位置に配置されること、を特徴とする。これにより、素材保持部が、容器本体内で流動する袋入りの嗜好素材を、より確実に捕捉して保持できる。また、たとえ、袋入りの嗜好素材を容器本体に入れたまま、飲み物を飲むときでも、飲み物の飲み易さが確保できると共に、袋入りの嗜好素材が、リップ部位に付けた口に接近することはない。

20

【0011】

(3)に記載する飲料用食器において、素材保持部は、容器本体の側部に固定されていること、を特徴とする。これにより、本考案に係る飲料用食器の構成が簡単になり、本考案に係る飲料用食器のコストを安価にすることができる。

30

【0012】

(4)に記載する飲料用食器において、素材流動規制手段は、容器本体の側部と着脱可能であること、を特徴とする。これにより、容器本体に取っ手がある場合、容器本体を掴む手が、右利き、左利きに拘わらず、素材流動規制手段を、リップ部位に合わせて容器本体の側部に自在に取り付けることができる。

【0013】

(5)に記載する飲料用食器において、素材流動規制手段は、素材保持部と連結する食器係留部を有し、食器係留部は、側部の上周縁に着脱されること、を特徴とする。これにより、容器本体を繰り返し使用する場合に、容器本体が、素材保持部が側部に固定された容器本体に比べて、洗浄し易くなる。

40

【0014】

(6)に記載する飲料用食器において、食器係留部は、周長方向に対し、途中区間で分割、または部分的に離間した離間部を有し、容器本体に素材流動規制手段を取付けた状態では、リップ部位が、離間部を通じて露出していること、を特徴とする。これにより、素材流動規制手段が、容器本体の側部に装着されていても、食器係留部に口を付けずに、リップ部位に口を直接付けて飲み物を飲むことができ、素材流動規制手段への違和感を低減することができる。

【0015】

(7) 容器本体内に嗜好素材を入れ、水を注ぎ、嗜好素材に含む嗜好成分を注いだ水に抽出してなる飲み物を、淹れて飲むのに用いる飲料用食器において、嗜好素材より小さい開

50

口でメッシュ構造に形成された素材保持部と、素材保持部に連結した食器係留部とを有する素材流動規制手段を備え、食器係留部は、容器本体の側部にある上周縁と着脱可能に形成されていること、食器係留部を上周縁に取り付けた状態では、容器本体内で、底面と、または側部の内面と底面とにより囲まれた内部空間を形成できるよう、素材保持部は、ドーム形状の形態、または容器本体内の開口断面を斜めに横切る形態に形成されていること、容器本体に水を注いだ後、または、飲み物を飲むときに、流動する嗜好素材が、内部空間内で保持されていること、を特徴とする。これにより、容器本体で飲み物を淹れるのにあたり、嗜好素材が、水（熱湯）を注入した容器本体内で、素材保持部より上方に浮上することなく、渋みや苦み成分の抽出を抑えつつ、飲み物のうまみ成分を、嗜好素材から熱湯等に、自然な状態で抽出することができる。ひいては、蒸らした嗜好素材から嗜好成分を自然な状態で抽出することにより、淹れた飲み物をおいしく味わうことができる。また、飲み物を飲むときに、飲み物と共に、嗜好素材が、口の中に入ることはない。

10

【0016】

（8）に記載する飲料用食器において、容器本体を閉塞する蓋を備えていること、を特徴とする。これにより、水（熱湯）を容器本体内に注いだ後、容器本体内の熱湯の温度が下がり難くなり、嗜好素材がより蒸らされて、嗜好成分を、より良好な状態で抽出することができる。ひいては、飲み物を、よりおいしく淹れることができる。

【図面の簡単な説明】

【0017】

【図1】実施形態1に係る飲料用食器で、容器本体とその蓋を示す斜視図である。

20

【図2】図1に示す容器本体の正面図である。

【図3】図1に示す容器本体を示す平面図である。

【図4】実施形態1，2に係る飲料用食器で、容器本体に飲み物を淹れて口にするまでの一連の様子を示す模式図である。

【図5】図3中、A-A矢視断面図により、蒸らしながら嗜好素材（コーヒー粉材）の嗜好成分を抽出している様子を示す説明図である。

【図6】実施形態2に係る素材流動規制部材を装着した状態の容器本体とその蓋を示す斜視図である。

【図7】図6に示す素材流動規制部材と容器本体との分解斜視図である。

【図8】図6に示す素材流動規制部材を容器本体に装着した状態を示す平面図である。

30

【図9】図8中、B-B矢視断面図により、容器本体に蓋をする様子を示す説明図である。

【図10】実施形態3に係る素材流動規制部材を装着した状態の容器本体とその蓋を示す斜視図である。

【図11】図10に示す素材流動規制部材と容器本体との分解斜視図である。

【図12】図11に示す素材流動規制部材を容器本体に装着した状態を示す平面図である。

【図13】図12中、C-C矢視断面図により、嗜好素材（茶葉）の嗜好成分を抽出している様子を示す説明図である。

【図14】実施形態4に係る素材流動規制部材を装着した状態の容器本体とその蓋を示す斜視図である。

40

【図15】図14に示す素材流動規制部材と容器本体との分解斜視図である。

【図16】図15中、D-D矢視位置に相当する位置から見た断面図で、嗜好素材（中国茶葉）の嗜好成分を抽出している様子を示す説明図である。

【考案を実施するための形態】

【0018】

（実施形態1）

以下、本考案に係る飲料用食器について、実施形態1～4を図面に基づいて詳細に説明する。実施形態1では、本考案の飲料用食器を蓋付きのマグカップとし、このマグカップは、豆を挽いたコーヒー粉材（本考案の嗜好素材に対応）を袋内に封入したティーバッグ

50

をカップ内に入れ、熱湯を注いだ後、コーヒー粉材に含む嗜好成分を熱湯に抽出してなるコーヒー（同じく、飲み物に対応）を、淹れて飲むのに用いる食器である。

【0019】

はじめに、飲料用食器1の構成について、簡単に説明する。図1は、実施形態1に係る飲料用食器で、容器本体とその蓋を示す斜視図であり、その正面図を図2に、この容器本体の平面図を図3に、それぞれ示す。図1に示すように、飲料用食器1は、マグカップである容器本体10と、この容器本体10の側部12にある上周縁13に嵌めて閉塞する蓋2とからなる組み物で、本実施形態では、陶器製、磁器製等の材質からなる。なお、飲料用食器1の材質は、例えば、プラスチック製、アルミニウム製、ステンレス製、チタン製、紙製等でも良く、特定の材質に限定されるものではない。

10

【0020】

容器本体10について、説明する。容器本体10は、図1～図3に示すように、底部11の底面11aの中心Qを通る軸線Xを軸心とする円筒状で、底面11aから上周縁13に向けて径大となるテーパ形状に形成された側部12を有している。側部12の上周縁13の一部が、飲み物5（コーヒー）を飲むのに口を付けるリップ部位14である。なお、図1以降の各図は、説明の便宜上、容器本体10等の取っ手15を右手で掴んで飲み物5を飲む場合を挙げて図示されているが、左手で取っ手を掴む場合には、取っ手の位置が、各図に図示した取っ手15の位置と、リップ部位14を挟んだ反対側になる。

【0021】

容器本体10は、素材流動規制部30（本考案の素材流動規制手段に対応）を備えている。素材流動規制部30は、容器本体10の底面11aに対向して配置される素材保持部31であり、容器本体10と同じ材質からなる。この素材保持部31は、本実施形態では、図3に示すように、注いだ熱湯8（水）や飲み物5の流通孔である4つの開口孔34Hを有する。また、素材保持部31は、上周縁13から深さ約2cmの位置（図3中、基準円PCの位置）に、側部12に固定した状態で、側部12の内面12aの一部から延設されている。

20

【0022】

素材保持部31について、具体的に説明する。ここで、リップ部位14を含み、かつ容器本体10の深さ方向Hに対し、側部12に沿う位置を第1基準位置P1とし、第1基準位置P1の反対側となる位置を第2基準位置P2とする。素材保持部31は、基準円PCの位置において、容器本体10内の開口断面Dのうち、第2基準位置P2側寄りの一部の範囲を残して、第1基準位置P1側の側部12に隣接する基部32から第2基準位置P2に向けた最外縁部33にわたって延在している。

30

【0023】

軸線Xと直交して、第1基準位置P1と第2基準位置P2とを繋ぐ線分の距離を容器開口距離Lとすると、この素材保持部31の最外縁部33は、第1基準位置P1を基点に、容器開口距離Lに対し、 $1/3$ 以上、かつ $2/3$ 以下の範囲内の距離に相当する位置に配置される。すなわち、本実施形態では、この最外縁部33は、容器開口距離Lの $1/2$ の距離に相当する位置にあり、4つの開口孔34Hの範囲を含めた素材保持部31全体が、基準円PCを外周とする円盤状の開口断面Dのうち、ちょうど半円分に相当する範囲を占めている。

40

【0024】

次に、蓋2について説明する。蓋2は、容器本体10と同じ材質からなり、鏝部を外周縁に有した略円板状に形成されている。蓋2は、容器本体10の側部12の上周縁13に対し、外側に鏝部を配置して、容器本体10の開口を閉塞する。なお、本実施形態では、容器本体10と蓋2をセットにした飲料用食器1を挙げたが、蓋のない、容器本体単体だけを飲料用食器としても良い。

【0025】

次に、飲料用食器1の使い方について、図4及び図5を用いて説明する。図4は、容器本体に飲み物を淹れて口にするまでの一連の様子を示す模式図であり、蓋を省略して図示

50

している。図 5 は、図 3 中、A-A 矢視断面図により、蒸らしながら嗜好素材の嗜好成分を抽出している様子を示す説明図である。

【0026】

はじめに、嗜好素材 6（コーヒー粉材）を封入したティーバッグ 7 を、容器本体 10 の底部 11 の底面 11a に入れる（図 4（a））。次に、容器本体 10 内に熱湯 8（水）を、素材保持部 31 を超える水位まで注ぐ。この後、必要に応じて、蓋 2 を側部 12 の上周縁 13 に置き、容器本体 10 を閉塞する。容器本体 10 内に熱湯 8 が注がれると、炭素ガスが嗜好素材 6 から発生する。また、ティーバッグ 7 に包含していた空気や、注入時に熱湯 8 に入った空気により気泡が発生するため、ティーバッグ 7 は、熱湯 8 の中で生じる浮力により、次第に液面に向けて浮上する（図 4（b））。素材保持部 31 は、浮上するティーバッグ 7 を確実に保持するため、ティーバッグ 7 が素材保持部 31 を超えて、液面で浮上することはない。そのため、ティーバッグ 7 が浮上しないまま、嗜好素材 6 の嗜好成分が、熱湯 8 に自然な状態で抽出される。

10

【0027】

この間、炭素ガスの発生が収まり、気泡が外部に抜けると、ティーバッグ 7 は、容器本体 10 の底面 11a に沈む。熱湯 8 の注入後、所定時間が経過したら、おいしい飲み物 5（コーヒー）が手軽に出来上がる。特に、熱湯 8 の注入後、図 5 に示すように、蓋 2 で容器本体 10 を閉塞すると、容器本体 10 内の熱湯 8 の温度が下がり難く、嗜好素材 6 がより蒸らされるため、嗜好成分を、より良好な状態で抽出することができる。

【0028】

出来上がった飲み物 5 を飲むときには、リップ部位 14 に口を付けて飲む。このとき、ティーバッグ 7 が容器本体 10 内に入ったまま、飲み物 5 を飲む場合でも、素材保持部 31 が、容器本体 10 内で流動するティーバッグ 7 を保持しているため、ティーバッグ 7 が、リップ部位 14 に付けた口に近づくことはない（図 4（d））。勿論、出来上がった飲み物 5 から、スプーン等を使ってティーバッグ 7 を取り除いて、飲み物 5 を飲んでも良い。

20

【0029】

次に、本実施形態 1 に係る飲料用食器 1 の作用・効果について説明する。飲料用食器 1 は、容器本体 10 内に、ティーバッグ 7 に封入された嗜好素材 6（コーヒー粉材）を入れ、熱湯 8（水）を注ぎ、嗜好素材 6 に含む嗜好成分を注いだ熱湯 8 に抽出してなる飲み物 5（コーヒー）を、淹れて飲むのに用いる。この飲料用食器 1 は、容器本体 10 の底面 11a に対向して配置される素材保持部 31 に、開口孔 34H が形成された素材流動規制部 30 を備える。ここで、容器本体 10 の側部 12 の上周縁 13 で、飲み物 5 を飲むのに口を付けるリップ部位 14 を含み、かつ容器本体 10 の深さ方向 H に対し、側部 12 に沿う位置を第 1 基準位置 P1 とし、第 1 基準位置 P1 の反対側となる位置を第 2 基準位置 P2 とする。素材保持部 31 は、容器本体 10 内の開口断面 D のうち、第 2 基準位置 P2 側寄りの一部の範囲を残して、第 1 基準位置 P1 側の側部 12 に隣接する基部 32 から第 2 基準位置 P2 に向けた最外縁部 33 にわたって延在している。容器本体 10 に熱湯 8 を注いだ後、または、飲み物 5 を飲むときに、素材保持部 31 は、容器本体 10 内で流動する嗜好素材 6 を保持する。

30

【0030】

これにより、容器本体 10 で飲み物 5 を淹れるのにあたり、ティーバッグ 7 が、熱湯 8 を注入した容器本体 10 内で浮上することなく、渋みや苦み成分の抽出を抑えつつ、飲み物 5 のうまみ成分を、ティーバッグ 7 に封入されている嗜好素材 6 から熱湯 8 に、自然な状態で抽出することができる。ひいては、淹れた飲み物 5 の味がよりおいしくなる。

40

【0031】

従って、本実施形態 1 の飲料用食器 1 によれば、飲料用食器 1 内に入れた嗜好素材 6 の浮上を防止した上で、蒸らした嗜好素材 6 から嗜好成分を自然な状態で抽出することにより、淹れた飲み物 5 をおいしく味わうことができる、という優れた効果を奏する。

【0032】

50

また、本実施形態 1 に係る飲料用食器 1 では、容器本体 10 の底面 11a の中心を通る軸線 X と直交して、第 1 基準位置 P1 と第 2 基準位置 P2 とを繋ぐ線分の距離を容器開口距離 L とすると、素材保持部 31 の最外縁部 33 は、第 1 基準位置 P1 を基点に、容器開口距離 L に対し、 $1/3$ 以上、かつ $2/3$ 以下の範囲内、すなわち $1/2$ の距離に相当する位置に配置される。これにより、素材保持部 31 が、容器本体 10 内で流動するティーバッグ 7 を、より確実に捕捉して保持できる。また、たとえティーバッグ 7 を容器本体 10 に入れたまま、飲み物 5 を飲むときでも、飲み物 5 の飲み易さが確保できると共に、ティーバッグ 7 が、リップ部位 14 に付けた口に接近することはない。

【0033】

また、本実施形態 1 に係る飲料用食器 1 では、素材保持部 31 は、容器本体 10 の側部 12 に固定されているので、飲料用食器 1 の構成が簡単になり、飲料用食器 1 のコストを安価にすることができる。

【0034】

また、本実施形態 1 に係る飲料用食器 1 では、容器本体 10 を閉塞する蓋 2 を備えているので、熱湯 8 を容器本体 10 内に注いだ後、容器本体 10 内の熱湯 8 の温度が下がり難くなり、嗜好素材 6 がより蒸らされて、嗜好成分を、より良好な状態で抽出することができる。ひいては、飲み物 5 を、よりおいしく淹れることができる。

【0035】

次に、実施形態 2 に係る飲料用食器について、説明する。前述した実施形態 1 の飲料用食器 1 では、素材流動規制手段である素材流動規制部 30 が容器本体 10 の側部 12 に固定されていたが、本実施形態 2 では、素材流動規制手段を、容器本体の側部と着脱可能な飲料用食器としている。従って、実施形態 1 とは異なる部分を中心に説明し、実施形態 1 と同じ部分については、同じ符号を用い、説明を簡略または省略する。

【0036】

図 6 は、実施形態 2 に係る素材流動規制部材を装着した状態の容器本体とその蓋を示す斜視図であり、図 6 に示す素材流動規制部材と容器本体との分解斜視図を、図 7 に示す。図 8 は、図 6 に示す素材流動規制部材を容器本体に装着した状態を示す平面図である。図 9 は、図 8 中、B-B 矢視断面図により、容器本体に蓋をする様子を示す説明図である。

【0037】

飲料用食器 101 は、マグカップである容器本体 110 と、この容器本体 110 の側部 112 にある上周縁 13 に嵌めて閉塞する蓋 2 と、素材流動規制部材 130（本考案の素材流動規制手段に対応）とからなる組み物である。容器本体 110 と蓋 2 は、本実施形態では、陶器製、磁器製等の材質からなる。

【0038】

素材流動規制部材 130 は、容器本体 110 の底面 11a に対向して配置される素材保持部 131 と、この素材保持部 131 と連結する食器係留部 136 とを有し、容器本体 110 の側部 112 と着脱可能に構成されている。素材流動規制部材 130 は、例えば、人口高分子化合物とするシリコンゴム(silicone gum)、 100°C の熱湯にも耐え得る耐熱性樹脂、紙等の材質からなる。

【0039】

素材保持部 131 は、本実施形態では、図 8 に示すように、注いだ熱湯 8 や飲み物 5 の流通孔である 4 つの開口孔 34H を有する。素材保持部 131 は、上周縁 13 から深さ約 2 cm の位置（図 8 中、基準円 PC の位置）に配置される。素材保持部 131 の最外縁部 133 は、実施形態 1 の素材保持部 31 の最外縁部 33 と同様、容器開口距離 L の $1/2$ の距離に相当する位置にあり、4 つの開口孔 34H の範囲を含めた素材保持部 131 全体が、基準円 PC を外周とする円盤状の開口断面 D のうち、ちょうど半円分に相当する範囲を占めている。

【0040】

食器係留部 136 は、容器本体 110 の側部 112 の上周縁 13 と着脱可能な係留溝 137 と、周長方向 C に対し、途中区間で分割して離間した離間部 138 を中央に有してい

10

20

30

40

50

る。飲料用食器 101 では、リップ部位 14 の位置を考慮して、容器本体 110 の側部 112 の上周縁 13 に、素材流動規制部材 130 の食器係留部 136 の係留溝 137 を嵌めると、容器本体 110 の側部 112 のリップ部位 14 が、離間部 138 を通じて露出する。蓋 2 は、容器本体 110 の側部 112 の上周縁 13 に取り付けられた素材流動規制部材 130 の食器係留部 136 に対し、外側に鏝部を配置して、容器本体 110 の開口を閉塞する。

【0041】

次に、本実施形態 2 に係る飲料用食器 101 の作用・効果について説明する。飲料用食器 101 では、前述した実施形態 1 において、段落〔0029〕～段落〔0034〕に記載した作用・効果と全く同じ作用・効果がある。その他に、素材流動規制部材 130 は、容器本体 110 の側部 112 と着脱可能で、素材保持部 131 と連結する食器係留部 136 を有している。食器係留部 136 は、側部 112 の上周縁 13 に着脱されるので、容器本体 110 を繰り返し使用する場合に、容器本体 110 が、前述の実施形態 1 の容器本体 110 に比べて、洗浄し易くなる。また、容器本体 110 の取っ手 15 を掴む手が、右利き、左利きに拘わらず、素材流動規制部材 130 を、リップ部位 14 に合わせて、容器本体 110 の側部 112 に自在に取り付けることができる。また、例えば、飲料用食器 101 の容器本体 110 が破損した場合等の事由により、飲料用食器 101 を構成する容器本体 110 以外の既存の容器本体に、素材流動規制部材 130 を取付けることも可能となる。

【0042】

なお、本実施形態 2 では、素材保持部 131 を、食器係留部 136 により吊設して容器本体 110 内に配置しているが、食器係留部を設けず、素材保持部だけを側部 112 の内面 112a に着脱する構成で、素材流動規制手段を、容器本体の側部と着脱可能としても良い。すなわち、容器本体 110 の側部 112 の内面 112a に係止部を設けることで、参照する本実施形態 1 の素材保持部 131 が、この内面 112a の係止部に着脱できて良い。

【0043】

また、本実施形態 2 に係る飲料用食器 101 では、食器係留部 136 は、周長方向 C に対し、途中区間で分割して離間した離間部 138 を有し、容器本体 110 に素材流動規制部材 130 を取付けた状態では、リップ部位 14 が、離間部 138 を通じて露出していること、を特徴とする。これにより、素材流動規制部材 130 が、容器本体 110 の側部 112 に装着されていても、食器係留部 136 に口を付けずに、リップ部位 14 に口を直接付けて飲み物 5 を飲むことができ、素材流動規制部材 130 への違和感を低減することができる。

【0044】

次に、実施形態 3 に係る飲料用食器について、説明する。前述した実施形態 1, 2 の飲料用食器 1, 101 は、嗜好素材を袋内に封入したティーバッグを、容器本体 110, 110 の底部 11 に入れて飲み物を淹れる食器としたが、実施形態 3, 4 の飲料用食器は、嗜好素材を容器本体の底部に直接入れて飲み物を淹れる食器である。また、実施形態 3 では、飲み物 5 は、緑茶等の日本茶や紅茶であり、嗜好素材は、茶葉である。従って、実施形態 1, 2 とは異なる部分を中心に説明し、実施形態 1, 2 と同じ部分については、同じ符号を用い、説明を簡略または省略する。

【0045】

図 10 は、実施形態 3 に係る素材流動規制部材を装着した状態の容器本体とその蓋を示す斜視図であり、図 10 に示す素材流動規制部材と容器本体との分解斜視図を、図 11 に示す。図 12 は、図 11 に示す素材流動規制部材を容器本体に装着した状態を示す平面図であり、図 12 中、C-C 矢視断面図により、嗜好素材（茶葉）の嗜好成分を抽出している様子を示す説明図を、図 13 に示す。

【0046】

飲料用食器 201 は、マグカップである容器本体 110 と、この容器本体 110 の側部 112 にある上周縁 13 に嵌めて閉塞する蓋 2 と、素材流動規制部材 230（本考案の素材流動規制手段に対応）とからなる組み物である。素材流動規制部材 230 は、容器本体

110の底面11aに対向して配置される素材保持部231と、この素材保持部231と連結する食器係留部236とを有し、容器本体110の側部112と着脱可能に構成されている。食器係留部236は、容器本体110の側部112の上周縁13と着脱可能な係留溝237と、周長方向Cに対し、途中区間で分割して離間した離間部238を中央に有している。素材流動規制部材230は、例えば、人口高分子化合物とするシリコンゴム(silicone gum)、100℃の熱湯にも耐え得る耐熱性樹脂、紙等の材質からなる。

【0047】

本実施形態3では、図10～図12示すように、素材保持部231は、注いだ熱湯（水）や飲み物5の流通孔として、嗜好素材6より小さい開口234を有したメッシュ構造で、ドーム形状に形成されている。飲料用食器201では、素材流動規制部材230の素材保持部231を容器本体110内に收容し、リップ部位14の位置を考慮して、容器本体110の側部112の上周縁13に、素材流動規制部材230の食器係留部236の係留溝237を嵌める。これにより、食器係留部236が上周縁13に取り付けられた状態では、図13に示すように、素材保持部231と、底部11の底面11aと、側部12の内面12a（この内面12aを必要としない場合もある）と、により囲まれて閉じた内部空間Sが、容器本体110内に形成される。容器本体110に熱湯を注いだ後、または、飲み物5を飲むときには、流動する嗜好素材6が、内部空間S内で保持されている。

【0048】

また、飲料用食器201では、容器本体110の側部112のリップ部位14が、離間部238を通じて露出する。蓋2は、容器本体110の側部112の上周縁13に取り付けた素材流動規制部材230の食器係留部236に対し、外側に鏝部を配置して、容器本体110の開口を閉塞する。

【0049】

次に、本実施形態3に係る飲料用食器201の作用・効果について説明する。飲料用食器201は、容器本体110内に嗜好素材6を入れ、熱湯（水）を注ぎ、嗜好素材に含む嗜好成分を注いだ熱湯に抽出してなる飲み物5を、淹れて飲むのに用いる飲料用食器である。この飲料用食器201は、嗜好素材6より小さい開口234でメッシュ構造に形成された素材保持部231と、素材保持部231に連結した食器係留部236とを有する素材流動規制部材230を備えている。食器係留部236は、容器本体110の側部112にある上周縁13と着脱可能に形成されている。食器係留部236を上周縁13に取り付けた状態では、容器本体110内で、底面11aと、または側部112の内面112aと底面11aとにより囲まれた内部空間Sを形成できるよう、素材保持部231は、ドーム形状の形態に形成されている。容器本体110に熱湯を注いだ後、または、飲み物5を飲むときに、流動する嗜好素材6が、内部空間S内で保持されている。これにより、容器本体110で飲み物5を淹れるのにあたり、嗜好素材6が、熱湯を注入した容器本体110内で、素材保持部231より上方に浮上することなく、渋みや苦み成分の抽出を抑えつつ、飲み物5のうまみ成分を、嗜好素材6から熱湯に、自然な状態で抽出することができる。ひいては、蒸らした嗜好素材6から嗜好成分を自然な状態で抽出することにより、淹れた飲み物5をおいしく味わうことができる。また、飲み物5を飲むときに、飲み物5と共に、嗜好素材6が、口の中に入ることはない。

【0050】

次に、実施形態4に係る飲料用食器について、説明する。実施形態4の飲料用食器は、素材保持部と食器係留部の各形状について、実施形態3の飲料用食器と異なる。また、実施形態4では、飲み物5は、中国茶であり、嗜好素材は、中国茶の茶葉であるが、その他については、同じである。従って、主に実施形態3と異なる部分を中心に説明し、実施形態1～3と同じ部分については、同じ符号を用い、説明を簡略または省略する。

【0051】

図14は、実施形態4に係る素材流動規制部材を装着した状態の容器本体とその蓋を示す斜視図であり、図14に示す素材流動規制部材と容器本体との分解斜視図を、図15に示す。図16は、図15中、D-D矢視位置に相当する位置から見た断面図で、嗜好素材

(中国茶葉)の嗜好成分を抽出している様子を示す説明図である。

【0052】

本実施形態4では、図14～図16示すように、素材保持部331は、注いだ熱湯や飲み物5の流通孔として、嗜好素材6より小さい開口334を有したメッシュ構造で、容器本体110内の開口断面を斜めに横切る形態に形成されている。飲料用食器301では、素材流動規制部材330の素材保持部331を容器本体110内に収容し、リップ部位14の位置を考慮して、容器本体110の側部112の上周縁13に、素材流動規制部材330の食器係留部336の係留溝337を嵌める。これにより、食器係留部336が上周縁13に取り付けられた状態では、図16に示すように、素材保持部331と、底部11の底面11aと、側部112の内面112aと、により囲まれて閉じた内部空間Sが、容器本体110内に形成される。容器本体110に熱湯を注いだ後、または、飲み物5を飲むときには、流動する嗜好素材6が、内部空間S内で保持されている。

10

【0053】

また、飲料用食器301では、容器本体110の側部112のリップ部位14が、離間部338を通じて露出する。蓋2は、容器本体110の側部112の上周縁13に取り付けた素材流動規制部材330の食器係留部336に対し、外側に鏝部を配置して、容器本体110の開口を閉塞する。

【0054】

本実施形態4に係る飲料用食器301によれば、容器本体110で飲み物5を淹れるのにあたり、嗜好素材6が、熱湯(水)を注入した容器本体110内で、素材保持部331より上方に浮上することなく、渋みや苦み成分の抽出を抑えつつ、飲み物5のうまみ成分を、嗜好素材6から熱湯に、自然な状態で抽出することができる。ひいては、蒸らした嗜好素材6から嗜好成分を自然な状態で抽出することにより、淹れた飲み物5をおいしく味わうことができる。また、飲み物5を飲むときに、飲み物5と共に、嗜好素材6が、口の中に入ることはない。

20

【0055】

特に、素材保持部331が、容器本体110内の開口断面を斜めに横切る形態に形成されていると、リップ部位14に口を直接付けて飲み物5を飲むときに、素材流動規制部材330が、容器本体110の側部112に装着されていても、素材保持部331への違和感を低減することができる。

30

【0056】

以上において、本考案を実施形態1～4に即して説明したが、本考案は上記実施形態1～4に限定されるものではなく、その要旨を逸脱しない範囲で、適宜変更して適用できる。

(1)例えば、実施形態1, 2では、開口孔として、図3等に示す形状の開口孔34Hを例示したが、形状、大きさ、レイアウト、及び数量に関する開口孔の構成は、実施形態1, 2に限定されるものではなく、種々変更可能である。

(2)また、実施形態1, 2では、飲み物5をコーヒーとしたが、飲み物は、例えば、緑茶や玄米茶等の日本茶、紅茶、葉草茶、ハーブティー、味噌汁や中華スープ、コーンスープ等のスープ類、健康食品飲料等、水の温度に関係なく、袋に封入された嗜好素材に含まれる嗜好成分を、袋を通じて水に可溶して抽出されるものであれば、何でも良い。

40

【0057】

(3)また、実施形態1～4では、容器本体10, 110をマグカップとしたが、本考案に係る飲料用食器(容器本体)は、これ以外にも、例えば、スープカップ、コップ、湯呑み、中国茶を淹れる蓋碗等の茶器等、嗜好素材に含む嗜好成分を注いだ水に抽出してなる飲み物を、淹れて飲むのに用いる食器であれば、何でも良く、その形状や大きさについても、適宜変更可能である。

【符号の説明】

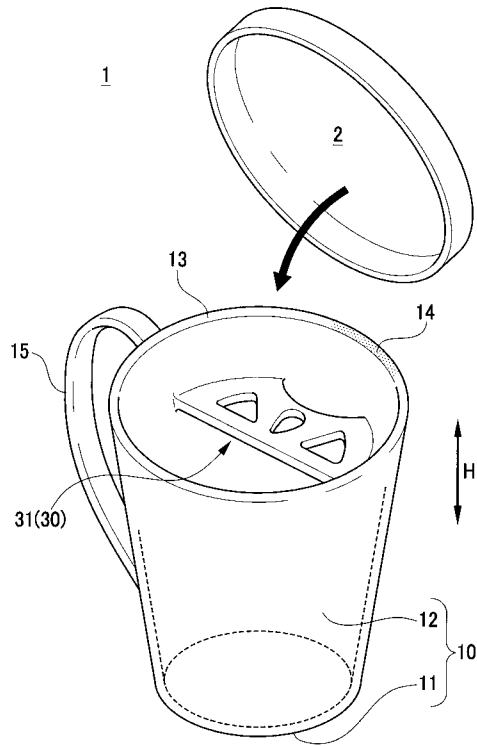
【0058】

1, 101, 201, 301 飲料用食器

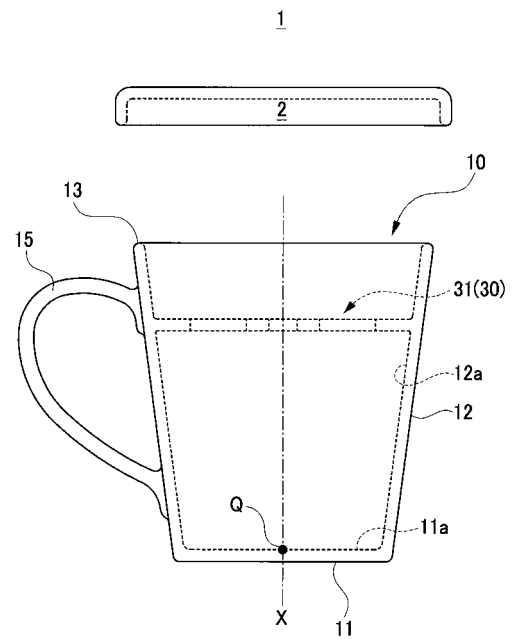
50

2	蓋	
5	飲み物	
6	嗜好素材	
7	ティーバッグ（袋）	
8	熱湯（水）	
1 0	, 1 1 0	容器本体
1 1 a		底面
1 2		側部
1 2 a	, 1 1 2 a	内面
1 3		上周縁
1 4		リップ部位
3 0		素材流動規制部 3 0
3 1	, 1 3 1, 2 3 1, 3 3 1	素材保持部
3 2	, 1 3 2	基部
3 3	, 1 3 3	最外縁部
3 4 H	, 1 3 4 H	開口孔
1 3 0	, 2 3 0, 3 3 0	素材流動規制部材（素材流動規制手段）
1 3 6	, 2 3 6, 3 3 6	食器係留部
1 3 8	, 2 3 8, 3 3 8	離間部
2 3 4	, 3 3 4	開口
C		周長方向
D		開口断面
H		深さ方向
L		容器開口距離
P 1		第 1 基準位置
P 2		第 2 基準位置
Q		中心
S		内部空間
X		軸線

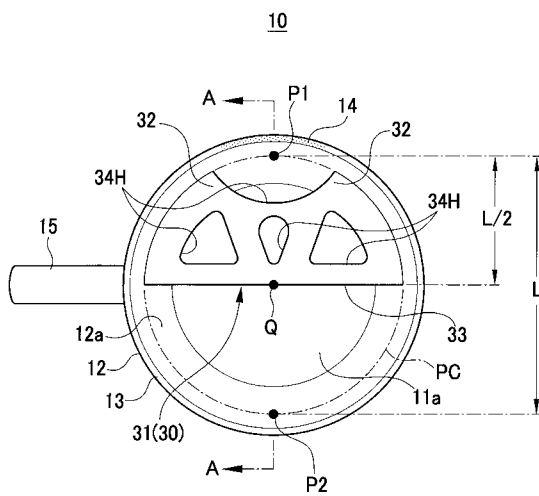
【図 1】



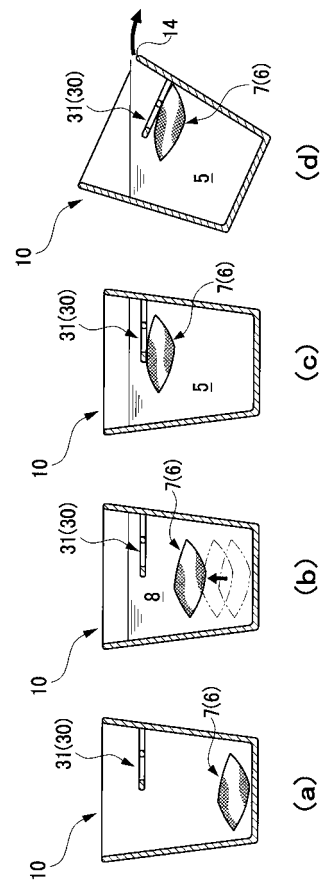
【図 2】



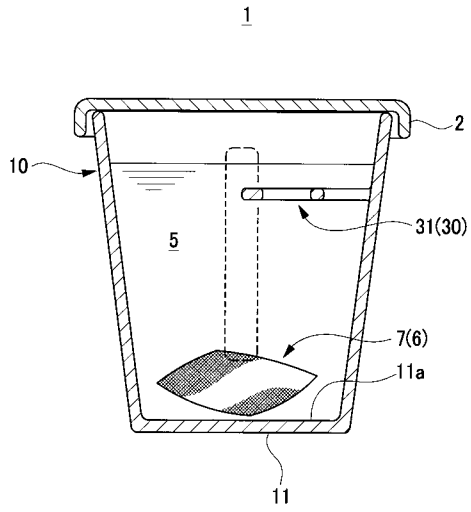
【図 3】



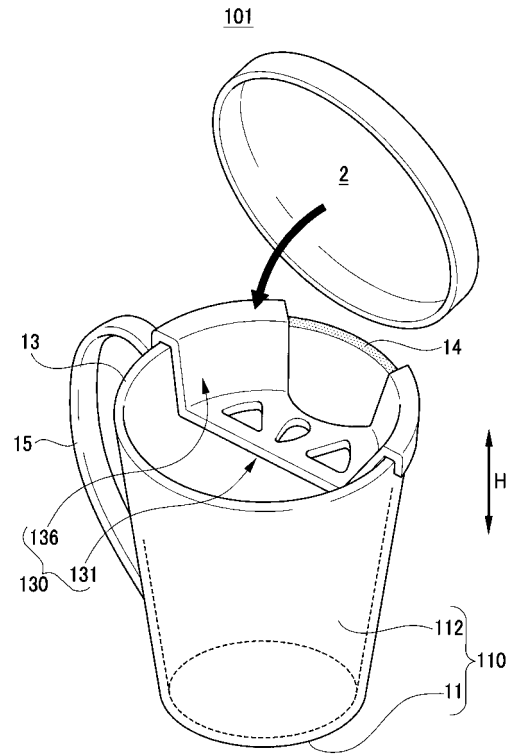
【図 4】



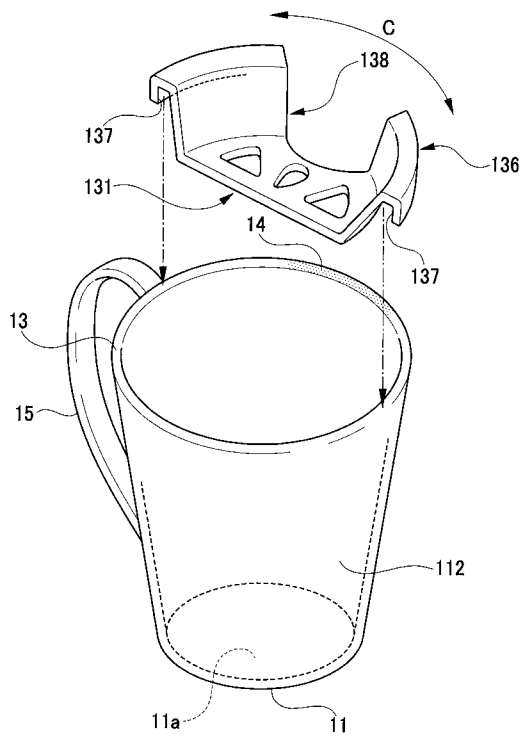
【図 5】



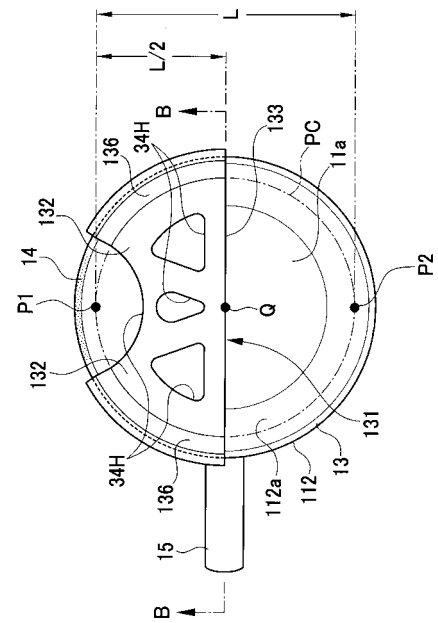
【図 6】



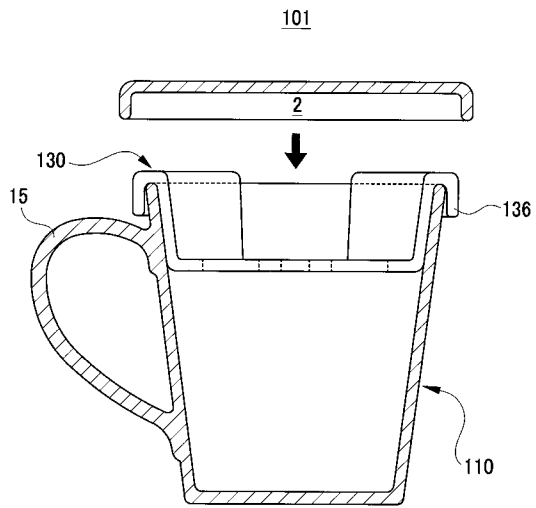
【図 7】



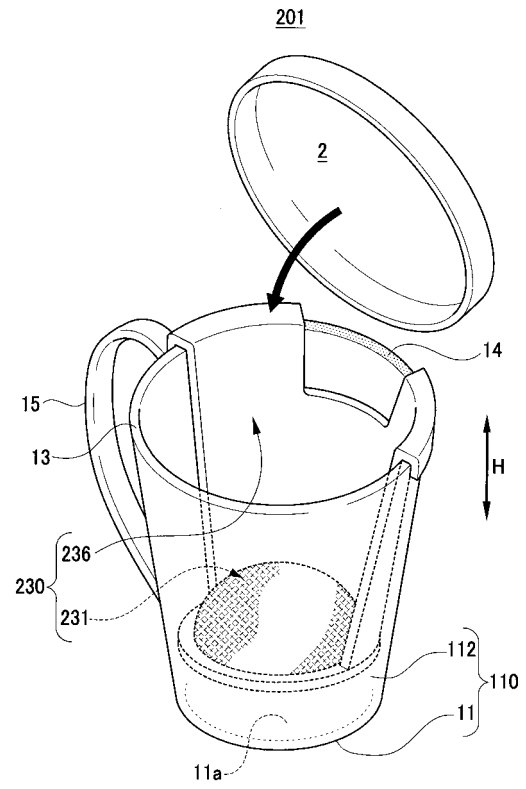
【図 8】



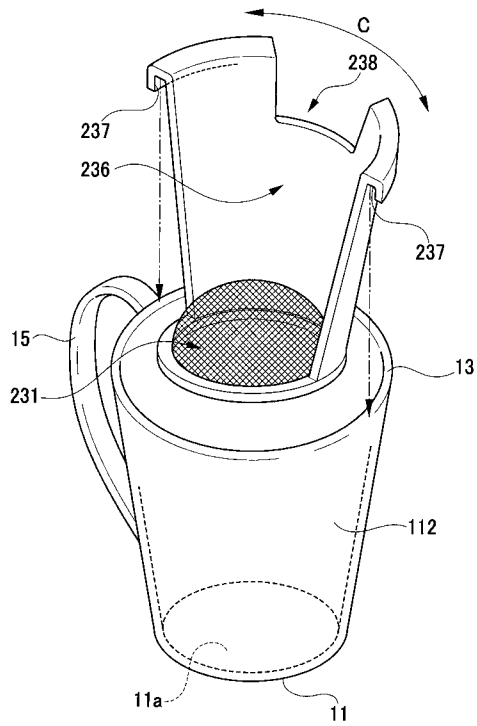
【図 9】



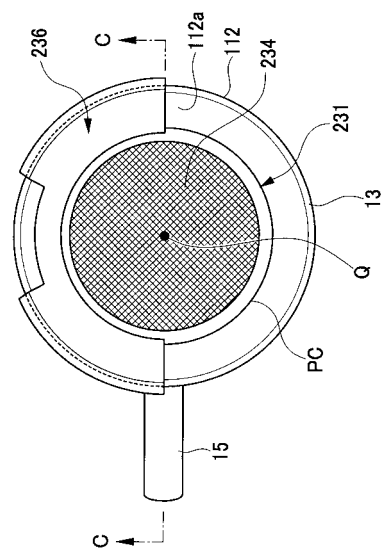
【図 10】



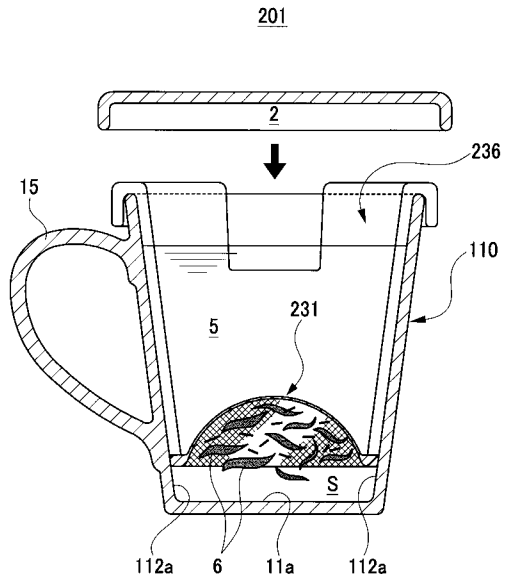
【図 11】



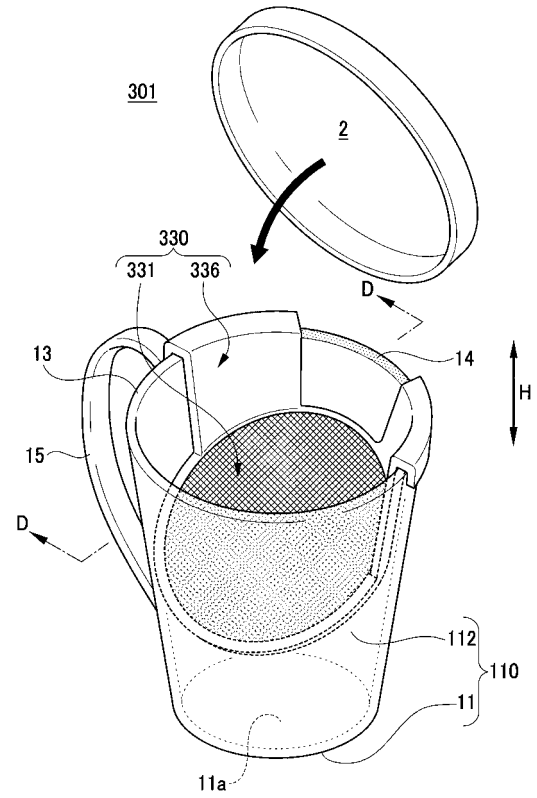
【図 12】



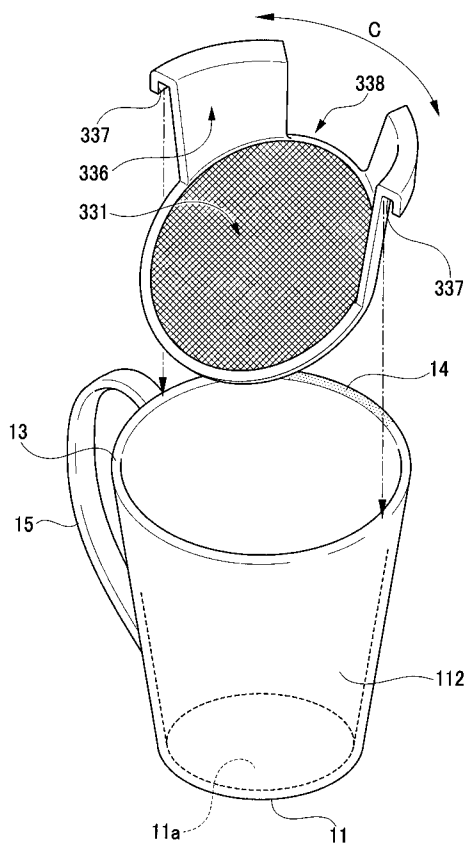
【図 13】



【図 14】



【図 15】



【図 16】

